

1. はじめに

裸複数名詞(bare plural noun: BP)は、場面レベル述語(stage-level predicate: SLP)と共起すると存在解釈と総称解釈の間で多義性を示す一方(=1a))、個体レベル述語(individual-level predicate ILP)と共起すると総称解釈だけを許す(=1b))。

- (1) a. Firemen are available. ($\checkmark$ generic / $\checkmark$ existential)
 b. Violists are intelligent. ($\checkmark$ generic / $\checkmark$ *existential). (Diesing (1992: 17-18))

本論では BP の解釈を決定するメカニズムについて検討する。

2. 先行研究

Diesing (1992)は、SLP は繰り上げ構造、ILP はコントロール構造を持つという仮定の下に、(2)の写像仮説(Mapping Hypothesis)によって、主語位置に生じた BP の解釈について分析している。

- (2) Material from VP is mapped into the nuclear scope.
 Material from IP is mapped into a restrictive clause. (Diesing (1992: 10))

しかし、Diesing の分析は目的語位置に生じた BP の解釈を正しく捉えられない。目的語位置の BP は必ず VP 内で狭い作用域を取るにもかかわらず(=3))、総称解釈(=4a))も存在解釈(=4b))も許容する。

- (3) a. Everyone read books on giraffes. (every>books / *books>every) (Carlson (1980: 12))
 b. Miles want to meet policemen. (want>policemen / *policemen>want) (Carlson (1980: 8))
 (4) a. John hates lawyers. (generic)
 b. John knows lawyers. (existential) (Cohen and Erteschik-shir (2002: 126))

López (2012)は目的語位置にある BP を分析している。López は、基底生成位置にある BP は存在解釈、派生位置にある BP は総称解釈を受けると提案している。この提案は、目的語が特定の解釈を受ける場合に VP 内部の僅かに高い位置に移動していることを示唆する(5)のデータと符合する。

- (5) a. I wrote all/these books_i on each other_i's advance.
 b. I often write books_i on each other_i's advance. (Stepanov (2001: 79))

しかし、López の分析は Spec, IP に基底生成される ILP 主語に対して存在解釈を予測してしまう点で問題がある。

3. 目的語繰り上げにおける BP

本節では目的語繰り上げにおける BP の解釈について新たなデータを提示する。make out 構文において、不定詞主語は不変化辞 out との間の語順交替を起こすことができる。この交替は、不定詞主語が主節 VP に随意的に繰り上がるか否かによって生じる(目的語繰り上げの証拠については Lasnik (1999)等の議論を参照)。

- (6) a. Mary made John out to be a fool. / b. Mary made out John to be a fool. (Lasnik (1999: 201))

ここで不定詞が vP 主要部であると仮定すると(Grano (2015))、目的語繰り上げの構造は(7)のようになる。

- (7) ... [vP v -made₁ [vP [John]₂ [v_0 t_1 out] [vP ~~John~~₂ to be a fool]]]

Diesing の分析に基づく、不定詞主語位置に BP が現れた場合には、基底生成位置も移動先も vP 領域であるために、一義的に存在解釈を示すことが予測される(あるいは、不定詞節が TP だとするならば、基底位置で総称解釈、移動先で存在解釈を得ることが予測される)。他方、López の分析では、移動前の位置で存在解釈、移動先の位置で総称解釈を得ることが予測される。以上の予測を踏まえて経験的事実を確認しよう。

不定詞節が SLP を伴う場合、out-DP 語順では存在解釈だけを示し、DP-out 語順では存在／総称の多義性を示す。

- (8) a. Mary made firefighters out to be available. ($\checkmark$ generic / existential)
 b. Mary made out firefighters to be available. ($\checkmark$ *generic / existential)

ILP を用いた場合、BP と不変化辞の語順に関わらず常に総称解釈だけを示す。

- (9) a. Mary made violinists out to be intelligent. (generic / *existential)
 b. Mary made out violinists to be intelligent. (generic / *existential)

以上の観察は、Diesing と López のいずれの予測とも食い違うものである。

4. 提案と分析

本論では(10)の Theta-based Mapping Hypothesis を提案する。(10)に基づく、上記の観察は次のように説明できる。

- (10) a. DPs in theta positions are mapped to nuclear scope (hence interpreted as existential nominals).
 b. DPs in theta-bar positions are mapped to restrictive clause (hence interpreted as generic nominals).

まず、SLP を伴う主語は基底生成時に theta 位置を、Spec, IP への移動によって theta-bar 位置をそれぞれ占めることになる。したがって、存在解釈と総称解釈の多義性を示すことが説明される。他方、ILP 主語の BP は theta-bar 位置に基底生成されるため、総称解釈だけを示すことが正しく予測される。

目的語位置に生じた BP の場合、López の議論によれば、基底生成位置では存在解釈、VP 内部で移動した派生位置では総称解釈を示す。基底生成位置が theta 位置、派生位置が theta-bar 位置であることを考えると、この事実もまた、(10)によって正しく予測可能である。

目的語繰り上げ構文における不定詞主語の BP の解釈の議論に移ろう。SLP を用いた場合、out-DP 語順では不定詞主語は不定詞内の theta-位置を占めることになる。したがって、存在解釈だけを示す。他方、DP-out 語順の場合は主節 VP の theta-bar 位置に移動するため、DP の連鎖は theta 位置と theta-bar 位置の両方を占めることになり、したがって BP は存在解釈と総称解釈の多義性を示すことが正しく予測される。

目的語繰り上げ構文の不定詞節が ILP を伴う場合を次に考えよう。Diesing にしたがって ILP を伴う文はコントロール構造を持つとすると、不定詞の vP 指定部位置には PRO が生成されることになる。コントローラーである DP は不定詞 vP に付加される位置にあらわれて、PRO をコントロールすることになるが、このときコントローラー DP は theta-bar 位置を占める。この構造において BP は一貫して theta-bar 位置を占め、総称解釈だけを示す。

- (11) ... [_{vP} v-made₁ [_{VP} [violinists]₂ [_{vO} t₁ out]] [[_{violinists}]₂ [_{vP} PRO_[+theta] to be intelligent]]]

以上、(10)の提案が主語・目的語・不定詞主語位置にあらわれる BP の解釈を統一的に捉えられることを示した。

5. Tough 構文

本節は、(10)の提案を tough 構文主語の分析に拡張する。tough 構文は weak quantifier 主語を許さず (Postal (1971: 29), Lasnik and Fiengo (1974: 544)), BP が主語位置に生起する場合には総称解釈だけを許す。

- (10) Cars are tough to park in Manhattan. (only generic reading) (Postal (1971: 29))

tough 構文主語は主節助動詞より低い作用域を取ることはできるが、主節形容詞述語より低い作用域を取ることはできない(= (10))。このことから、tough 構文主語は主節 vP 内部に基底生成されていると考えられ、したがって派生中、一貫して theta-bar 位置を占めていることが示唆される(= (11))。

- (10) [Two books] must be hard to read. [must > two > hard / *must > hard > two] (Poole and Keine (2024: 5))

- (11) [_{TP} [two books]₁ must [_{vP} [~~two books~~]₁ be hard [_{CP} to read]]]

この(11)の構造を踏まえると、Diesing の想像仮説は tough 構文の主語に対して存在解釈と総称解釈の多義性があるという誤った予測をしてしまう。なぜなら、tough 構文主語は vP 領域に基底生成されているからである。他方、本論が提案する Theta-based Mapping Hypothesis (10)によると、tough 構文の主語は派生の中で一貫して theta-bar 位置を占めることから、総称解釈しか許さないことを正しく予測することができる。したがって、tough 構文に関する事実は、Diesing の分析に対する本論の分析の優位性を示す証拠となる。

6. 結語

本論は目的語繰り上げに関する新たなデータを提示しながら、BP の解釈に関する先行研究を批判的に検討し、(10)を提案した。(10)は BP の解釈のパターンを正しく説明できる。また、本論の提案を tough 構文の主語が示す総称解釈にも拡張した。本論の分析が正しい限りにおいて、BP の解釈について次の一般化が成り立つ。(12)から、外的併合は theta 位置に限られず、theta-bar 位置への外的併合もあるという理論的示唆が得られる。

- (12) Bare plurals that only exhibit generic reading are associated with no theta-role.

* 本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2114 の支援を受けている

参考文献 Carlson, G. (1980) *reference to Kinds in English*, Garland Publishing. / Cohen, A. and Erteschik-shir, N. (2002) "Topic, Focus, and the Interpretation of Bare Plurals," *Natural Language Semantics* 10, 125-165. / Diesing, M. (1992) *Indefinites*, The MIT Press. / Grano, T (2015) *Control and Restructuring*, Oxford University Press. / Lasnik, H. (1999) "Chains of Arguments," *Working Minimalism* ed. by Samuel David Epstein and Novert Hornstein, 118-215, The MIT Press. / Lasnik, H. and Fiengo, R. (1974) "Complement object Deletion," *Linguistic Inquiry* 5, 535-571. / Poole, E. and Keine, S. (2024) "More on (the Lack of) Reconstruction in English Tough-constructions," *Linguistic Inquiry* 55, 871-884. / Postal, P. (1971) *Cross-over Phenomena*, Holt Rinehart and Winston Inc. / Stepanov, A. V. (2001) *Cyclic Domains in Syntax*. PhD dissertation, University of Connecticut.